子どもにとって楽しい
音楽リズムのあり方を考える(5)

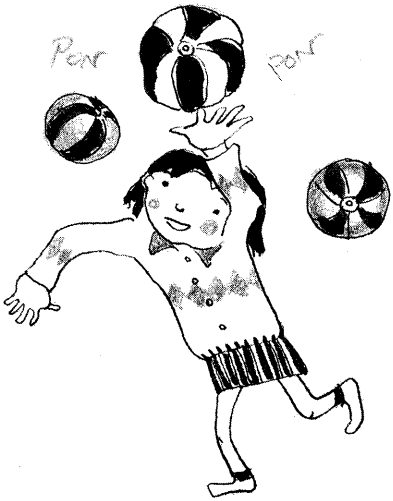
原口　純子

7、劇あそび、オペレッタ（生活発表会とは何か）年長

オペレッタ、「森の詩　パートⅡ――金のがちょうを探しに」年長かえで組の経験、活動。生活発表会は、歌、踊り、台詞を中心に音楽劇を構成し、一つの課題を中心に活動する一種の課題活動である。音楽リズムを中心とした総合活動として、どのように構成し、運営されていくかをかえで組のケースを中心にまとめてみる。

(1)　クラスの実態

男児18人女児16人　計34人　年少時より学級担任が四回変わり、今回生活発表会をしたのは9月からクラスを



持ったばかりの担任である。クラス全体がやや落ちつきとまとまりに欠ける。自己中心的な子が多く、クラス全体をリードしていくようなリーダーはいない。生活発表会に当たっては主任が補佐に当たった。

(2) テーマの選択理由

運動会終了後もテープをかけては白雪姫ごっこをしている子どもたちの実態から、この話に〝金のがちょう〟の話をとり入れて変化をもたせパートⅡとして創作した。

(3) 構成と配役　主な経験

花の精　8人、お姫様　8人　踊り――台詞――わらべうた（鬼きめうた、つるつる）――鬼に変身、うた（こまったな）――応援、がんばれポーズ

王子様　9人　歌（ラララ王子）――台詞――とびばこ、ガキガキ岩のぼり、金のがちょうを見つける

魔法使い　9人　歌――台詞――鬼の魔法をかける――一本橋渡り――岩のぼり

フィナーレ　フォークダンス――制作、小道具作り、木をつくる

〈事例と考察〉

事例17　一度使った曲で踊りを変えることはできない。

教師はお姫様の踊りを、曲は運動会の曲そのままで振りつけのみを少し複雑に変化させたいと考えた。キャンディワルツを流して、「少し変えてみようか」と提案し、教師が踊ってみると子どもたちも教師のとおり踊るが、教師がぬけると、また昔の踊り方にもどってしまう。後から新しい動きを表現させても音楽がなると反射的に以前身についた動きにもどってしまう。

〈考察〉

子どもの経験はすり込み効果が大きく、一旦身につけたもの、おぼえたものを後で変更することは非常にむずかしいことを示している。このことは幼児教育全般についても言えることで、初期経験の大切さであり、幼児教育の大切さをも示している。

事例18　教師の提案を拒否するC子

曲に合せて自分たちで動きを考えるが、お姫様の踊りで教師が「ここ、こういう風なのはどうかしら」と提案

してもC子は「イヤッ」と強い言葉で拒否して自分の思った通りに全体を動かしたい。強いリーダーで自分をゆずったり、他人の意見をとり入れることのできない強い子どもの意見に全体がひきずられる傾向がある。

〈考察〉

子どもが育つということは、自分の意見を持てるということであり、又他人の意見をも聞く耳を持てることである。これまでの生活の中で、ままごとにしろ、他の遊びの中にしろ、自分の思う通り我ままいっぱいにふるまってきたC子にしてみれば教師の提案であろうと、気に入らないものは「イヤッ」と断固拒否するのは不思議ではない。生活発表会を経験する中で、個々の子どもの様々な側面の育ちがあらわになる。

事例19　自信のある子から順に並ぶ序列が決まる

魔法使い役は男児6人いるが、出てくる順番や並び方は教師は何も指示していない。が、出てくる順番や岩登りをする順がいつも力の強いA男を先頭に力の強い順に決まってくる。台詞や動作、歌などもはっきりやるのは前の3人ぐらいで後の6人は台詞も歌もよく覚えていない様子である。後の方にごそごそくっついて並んでいるだけで、課題への意欲も熱意もうかがえない。

〈考察〉

先頭にいるA男は四月生まれで何をするにも教師の意図をくみ、的確に行動することができる。友だち関係においてもリーダー格で他の子に尊敬されている。又後についている子どもたちは生まれの遅い子どもたちが多い。集中する力、課題意識など内面の成長も歴年令の育ちと関係している傾向がうかがわれる。

事例20　金のがちょうを持つ人になりたくてトラブルが起こる

魔法使いのところにある金のがちょうを王子がみつけ、もらう場面で、何回やっても、誰が金のがちょうをもらう役になるかで毎回けんかが起こる。そこで事前に順番を決めておくが、尚、その場になると持ちたい子が手を出す為ゴタゴタが起こって劇が中断される。

〈考察〉

子どもは劇全体をよく理解してその流れの中で役になりきっているとは言えない。金のがちょうを持ちたいというのは地の自分がまる出しになっている。自分の欲求や欲望が役を越えて、生にぶつかりあい、トラブルが起きて、劇が中断されようとも我を張り合うことになる。

(4) 生活発表会の意味と問題

生活発表会というのは正に子どもの育ちそのものが現れるものである。劇又はオペレッタというクラス全体でとりかかる課題活動は、四月から、子どもたちがさまざまな遊びや生活を通してどう育ってきたかによって大きく影響される。単に劇やオペレッタが上手に演じられたかどうかの表面上の問題ではなく、そこに到る過程が問題である。レコードに合わせて教師の言いなりになっていわば猿まわしの猿のような劇ではなく自らのものとして主体的にとりくめるためには個々の内面的なものが育っていなければならない。従ってクラスの子どもの育ちに合せてというのはそれらの育ちのことである。

内面の育ちを次のように考える

(ア) 教師と子どもの信頼関係 → 担任がクラスの子どもの気持ちをどの程度掌握しているか

(イ) クラスの仲間意識 → 良い友だち関係が形成されているか、クラスのためにがんばろう

(ウ) 課題意識 → 生活発表会を自分たちの課題としてがんばろうとする気持ちを持てる

(エ) 自制心、がまんする心 → 多少いやでもがまんする力、待つ事、他人にゆずる気持ち

(オ) 自分の意見を述べ、他人の意見も聞く → おどりの振りや台詞を考えたり提案する

(カ) 意欲、やる気 → 自分からしようとする気持ち、事に当たってがんばろうとする意欲

(キ) うたうこと、おどること、その他とび箱やなわとびに挑戦してがんばる気持ち

以上の七点は教えてできるものではなく実に細々とした四月からの遊びやただの生活のつみ重ねの中で育てられてくるものであることがわかる。これらのものがしっかりと育っていないとクラスでまとまった劇遊びは、む

ずかしいことがわかる。

オペレッタを通して見えてきた子どもの実態

(1)子どもの自己中心性――・自分の気持ちのままに我を張って他人の意見を聞こうとしない

・一番になりたい、金のがちょうを持ちたいととり合いやケンカをする

(2)集中できない――一つの事をしようとしても勝手におしゃべりをしたりして集中できぬ。

(3)本気で事に当たれない

(4)'意欲の乏しさ

王子の役をやっているのに台詞や歌もよくおぼえず先頭の人にただついてまわっている後の子ども

(4)気分が不安定で、注意されるとふてくされ気持ちが頑固になる

(5)散漫で持続力が乏しい――劇中のバックに使う木を作る時に「やるやる」と威勢良く参加してくるものの5分とたたないうちにあきて他の方にさって行く。

(6)他人のことはやたらに大声で非難するが、自分では決して責任をとらず他人のせいにする。

子どもの実態というのは以上のことから、心の発達、気持ちの発達であることがわかる。子どもの意欲や興味に合わせて、オペレッタのテーマや素材を考えていかないと、無理な課題を背負わせ先生も子どもも苦労をすることになる。

台詞の問題、劇やオペレッタと野外劇のちがいは台詞の有無のちがいでもある。原則として文字の知識を持たない幼児に長い台詞を暗記させようとすればいきおいオオムガエシに何度も言っておぼえさせることになるし、よほど意欲や主体性がない限りおぼえ切れないことになる。従って幼児の劇を台詞によってはこぶことは、不適当であることがわかる。大人さえも長々と台詞を暗記することは困難であることを考えればなおさらである。ごく筋にそった単純なせりふ、例えば「私は野ねずみです」「○○さんこんにちは」程度のものであれば無理を

しないですむ。子どもの台詞の程度は彼らが日常生活の中でおこなうままごとや、さまざまなごっこ遊びの会話を聞いていればおおよその見当はつくものである。

声量からいって四歳又は五歳の子どもが舞台の上で話して聞こえるというのはごく限られた子どもである。この点からすれば幼児の劇遊びはプレイルームを用いず保育室を用いる考え方は一つの方便である。プレイルームでおこなう場合は4、5名から10名程度の子どもが声をそろえて台詞を言うことになるが、これもどんなに簡単な会話でも、言い始めのタイミング、全体の速度などむつかしいことである。そうしないとガサガサになってしまうことから何度も練習をしないとできないことになる。わらべうたや歌になっているものはかなりの長さも平気で楽しんで言えること、タイミングが伴奏でそろえられること、声量が上ること、幼児の劇がオペレッタ形式になってうたいながらすすめられ、教師のナレーションで物語が補足説明されてすすめられることは合理的なことと言える。このことから幼児向のオペレッタや劇遊びのレコードや脚本集が多く出ているが、音から台詞から動きまで全て決まっている既製品に子どもを合わせることは、レコードや脚本にふりまわされ子どもの表現力も教師の創造性も生かされる余地はなく、何のためにオペレッタをしているかわからなくなる。

(5) 指導のポイント

(ア)クラスの実態により、脚本選定が、今の自分のクラスの子どもたちの育ちに合っているかどうか。（集中力、仲間の育ち、意欲）その程度によってストーリー性、劇の山場をいくつもって来れるか、台詞の量、歌やダンス、体育的なとび箱や側転等の課題の量と質が決められてくる。

(イ)子どもがストーリーをよく理解していること。何がどうなる話しで、その中で自分は何の役をやっているかがわかっていること

(ウ)次の動作へのメリハリがはっきりしていること。例、花の踊りが終わったら花は後にさがってお姫様が登場する。という具合にAの次はB、という動きが子ども

に明瞭にわかること。ストーリーで動いているというより、子どもはその場その場の合図や明解な変化に従って動いている。これが理解できることにより、教師の指示によって動くのではなく、子ども自身で動けるようになる。

◇劇のねらっているものは何か――まとめ

クラスが一つになって力を合わせて一つの劇をつくりあげることであり、その中に歌うこと、踊ること、ストーリーを展開すること、必要なさまざまな小道具を作ることなど、多くの要素の含まれた総合活動である。しかし現実にやってみて、生活発表会というのは面(おもて)をつくろうことのできない内面の育ちを表現するものと考えなければならない。いかに教師が力んで踊りや台詞を教えようとしても、子どもの側に意欲や自覚ややる気が育っていないと教師のからまわりになりおぼえない。やる気もないことになり、教師も子どもも苦労ばかりすることになる。意欲ややる気、自覚というのはどういう経験を通して育ってくるのであろうか。クラスによっても、子どもの個人差としてもバラつきが大きい。園ではひどく無気力に見える子どもが家に帰って母親の前で演じたり、歌ったり、発表会の日を前に緊張していたことなどを後日聞くと、園で見る無気力が全てでないこともわかる。子どもの能力、発達特性から生活発表会だからといって大人の演劇スタイルのものを求めてはならないし、もっと子どもに向いたスタイルのものを考え、楽しんでできるものでなければならない。「何の劇をするか」を先に決めるものではなく、子どもの育ちをよく知りその上で可能なものを選び、幼い子どもにはそれなりに、十分に力のある子どもには発揮できる場を与えて、それぞれの力に合ったやり方のできるものを教師が構築していくことと言えよう。

Ⅳ　まとめ――子どもにとってたのしい音楽リズムのあり方

(1)　音楽リズムは今日子どもの扱えるテープレコーダー(パンプキン)の開発により状況は大きく変わった。歌、

楽器、踊り、音楽の鑑賞などもかっては機械の管理上又はピアノ等の技術上のことから、教師主導型の活動から、子どもが自由に曲を選んでうたったり、踊ったり、楽器を鳴らしたりしてたのしむことができるようになった。このことによって一方的に教える音楽リズムから、自らたのしむ音楽としてさまざまな遊びの中に同化し、音楽リズムそのものが生活化されたと言えよう。一方歌や踊りでどんな曲を選ぶか、踊りの振りのしかたを提案するかは教師の責任であり、幅広い研修が必要である。

(2) わらべうたは振り、言葉（となえ文句）、ゲームなどが一体となった教材で、どんな子どもでも参加できる点、社会性の成長の上でも極めて有効な遊びである。日本のわらべうた、外国のものを問わず、多くの遊びをおぼえて子どもにたくさん経験させたいものである。

(3) 運動会の野外劇から子どもにとって動くということがどんなにか基本的に自然であるかがわかった。踊ることはもとより、鑑賞もうたうことも、楽器を鳴らすことも極めて心地よくたのしんでおこなうことができる。

(4) オペレッタ等の生活発表会での活動は、それまでの子どもの内面の育ち（意欲、やる気、自制心、課題意識、クラスの仲間意識、他人のまちがいや失敗を許せる気持ち、教師と子どもの信頼関係など）が非常に大切なことがわかった。これらのベースの上に立って子どもが興味を持ってさまざまな力を発揮できるテーマを選ぶことである。

どんな活動にあっても子どもは常に全体として存在し、部分だけの指導ということはありえない。我々教師は多くの教材研究をし自分自身豊かな音楽経験を持つと共に、子どもの内面の成長を注意深くサポートしていかなければならない。

——終——

（つくば市立桜南幼稚園）

※ この論文は、昭和62年の研究論文として発表されましたものを、連載いたしました。　編集部